ISSN 1344-2163

印西の歴史

第八号　平成27年3月

千葉妙見社から見る千葉氏と原氏
～戦国期を中心に～　日暮　冬樹 …… 1

北総産須恵器の再検討　松本　太郎 …… 26

印西市域の庚申塔と十九夜塔および子安塔について　蕨　由美 …… 45

阿夫利神社祭礼の神輿渡御と梯子立て神事　髙橋　克 …… 69

【史料紹介】
武藤家文書の『房総新聞』にみる印西市域　矢嶋　毅之 …… 88

【報　告】
近現代部会の活動　中澤　惠子 …… 109

印西市域の庚申塔と十九夜塔および子安塔について

蕨　由美

はじめに

庚申塔や月待塔など庶民信仰に関連する江戸時代からの石造物は、房総でも特に印西市域において数多く寺社境内や路傍に見られ、その数は、昭和五十四年～平成三年に報告された印西町教育委員会の石造物悉皆調査[1]によれば、総数三〇五六基中、三分の一の一一五六基に及んでいる。その概略は、『印西町石造物』の『第一集』から『第八集』とその『追録』、さらにその一般向け総集編として刊行された『石との語らい』で報告され、[2]また、十九夜塔など北総の女人信仰のかかわる石塔については、印西町に在住した榎本正三氏の著書『女人哀歓－利根川べりの女人信仰』[3]に詳しく紹介されている。

筆者は、北総、特に印旛沼周辺の講による石造物のうち、庚申塔や十九夜塔と並んで数が多い子安塔に興味を持ち、その全数把握と分析を行ってきた。本稿では、最新の研究報告から印西市域と隣接市町域の庚申塔および十九夜塔の概況と、筆者が調べた同地域の子安塔の成立と現況について述べていきたい。

なお、現在の印西市と平成二十二年の合併以前の印西市の範囲と区別するため、旧印西市は「印西地区」、旧印旛村は「印旛地区」、旧本埜村は「本埜地区」の名称を用いる。

使用したデータは、印西地区は『印西町石造物第一集～第八集』[4]、白井市は『白井町石造物調査報告書』第一集～第四集、[5]八千代市は『八千代市の歴史　近代・現代Ⅲ　石造文化財』[6]による。その他の市町村については、『千葉県石造文化財調査報告』[7]および電子データ「下総地方中部８市町村石造文化財データベース２０１１年版」[8]、十九夜塔は石田年子「下総地方の十九夜塔と女人講」[9]、子安塔は拙稿「北総の子安像塔の系譜＝江戸時代中期におけるその出

現と成立について[10]・「北総の子安像塔＝江戸時代後期（文化～天保期）の展開について[11]」・「北総の子安像塔＝江戸時代末期から現代までの様相について[12]」のデータを加えたものである。

時代区分は、筑波大学での日本美術シソーラスで使われた次の「時代区分」による。

江戸時代前期＝一六一五～一七一六
江戸時代中期＝一七一六～一八〇四
江戸時代後期＝一八〇四～一八六八
近　　代＝一八六八～一九四五
現　　代＝一九四五～

一　庚申塔の概況

1　近世庚申塔の成立と江戸時代前期の様相

庚申塔は、最も普遍的で数も多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物である。庚申待は、六十日に一回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透し庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」を建立する風習が、江戸時代、各地に定着した。

表1と表2は、印西市とその周辺市町の庚申塔・十九夜塔・子安像塔・子安文字塔と石祠の各基数（百庚申は件数で集計）および、その初出年銘である。

印西市域の庚申塔数は、六三六基と、周辺の市町と比べても、抜きんでて数が多い。市町村別の石造物数は、自治体の調査対象の幅や選択法などによりデータ数が異なり一概に比較できないが、庚申塔の場合、おおむね全数が調査されており、その数は各地域の石造物数の濃密度の指標となると思われ、その点から見ても、印西市域は石造物の豊富な地域性を示している。

近世庚申塔の関東における初出は、元和九年（一六二三）の足立区正覚院の弥陀三尊来迎塔と三郷市常楽寺の山王廿一社文字塔、千葉県最古は松戸市幸谷観音境内の寛永二年（一六二五）の山王廿一社文字塔と報告されており、下総地域への伝播は、江戸川に接する東葛地域からもたらされると推定される。印西市に隣接した地域では、佐倉市の慶安三年（一六五〇）先崎地蔵尊の丸彫り地蔵坐像、ついで我孫子市の高野山香取神社の文字塔と青山八幡神社の三猿付が古く、ともに板碑型で万治二年（一六五九）の銘がある。[13]

続いて、八千代市吉橋の高本八幡社の万治三年銘の三面に一匹ずつ三猿を浮彫りにした笠付角柱型、そしてその翌年の寛文元年（一六六一）には、竹袋観音堂においても台

表1　印西市と周辺地域の講石塔の数

	庚申塔	十九夜塔	子安像塔	子安文字塔・石祠
印西地区*	366	218	111	10
印旛地区*	170	100	108	0
本埜地区*	100	58	38	1
印西市計	636	376	257	11
白井市	270	83	52	2
八千代市	432	86	141	17
佐倉市	125	80	103	2
酒々井町	20	19	17	1
成田市*	119	61	8	4
我孫子市	246	69	3	1
周辺市町計	1212	398	324	27

＊印西地区は旧印西市域、印旛地区は旧印旛村域、本埜地区は旧本埜村域、成田市は旧成田市域を示す

表2　印西市と周辺地域の講石塔の初出年

	庚申塔	十九夜塔	子安像塔	子安文字塔・石祠
印西地区*	寛文元年（1661）	寛文5年（1665）	天明7年（1787）	元文3年（1738）
印旛地区*	元禄13年（1700）	寛文6年（1666）	宝暦3年（1753）	寛延3年（1750）
本埜地区*	延宝3年（1675）	寛文9年（1669）	安永5年（1776）	安永5年（1776）
白井市	寛文10年（1670）	寛文10年（1670）	文化6年（1809）	寛政12年（1800）
八千代市	万治3年（1660）	寛文11年（1671）	文化11年（1814）	元禄16年（1703）
佐倉市	慶安3年（1650）	寛文9年（1669）	寛政6年（1794）	元文4年（1739）
酒々井町	正徳元年（1711）	延宝2年（1674）	享保18年（1733）	天明5年（1785）
成田市*	延宝8年（1680）	寛文11年（1671）	宝暦2年（1752）	文政6年（1823）
我孫子市	万治2年（1659）	寛文8年（1668）	天明元年（1781）	明和7年（1770）

＊印西地区は旧印西市域、印旛地区は旧印旛村域、本埜地区は旧本埜村域、成田市は旧成田市域を示す

座に三猿が刻まれた聖観音立像が建てられている。（写真1）

このように一六六〇年前後の短い間にこの地域に庚申待の宗教儀礼とそれに伴う造塔が普及していくが、像容は三猿や諸仏の彫像、文字のみの供養塔などさまざまな形態をとり、主尊も定まっていない。

やがて印西市域とその周辺地域で、青面金剛像を主尊に浮彫りした典型的な庚申塔になっていくのは、寛文十一年（一六七一）銘の小林の砂田庚申堂内の四臂の青面金剛像（写真2）から、近隣では、延宝二年（一六七四）の八千代市大和田新田路傍と、同年の佐倉市天辺宝寿院の庚申塔が造立される頃からである。

青面金剛は、もとは流行病を流行らせる悪鬼であったが、のち改心して病魔を駆逐する善神になったという仏教説話が、鎌倉時代の「渓嵐拾葉集」にあるという。[14]「陀羅尼集経九大青面金剛呪法」による儀軌では、「一身四手」で「身体青色、口を張り牙を出し、真っ赤な目をもつ・・」とあるが、二手を合掌し宝輪・

写真1　竹袋観音堂の聖観音立像庚申塔　寛文元年銘
（埋没した台座に三猿が浮彫り）

写真2　砂田庚申堂内の四臂青面金剛像庚申塔
寛文十一年銘

（一七一五）銘の青面金剛像に二鬼三猿二童子に加えて二仁王が彫像された塔（写真3）、享保十七年（一七三二）の結縁寺青年館前の笠付型の塔など、手の凝った庚申塔が建てられる一方、印旛地区造谷路傍の宝永三年（一七〇六）銘の塔や印西地区船尾東光院の延享三年（一七四六）銘の塔（写真4）など、簡潔で洗練された意匠の像容も見られ、江戸前期末から中期初めにかけての青面金剛像塔には、優れた像容の石塔が多い。

2　地域的な特徴を示す中期の庚申塔

その後、印西市を中心とした下総地域では、青面金剛像塔が数的にも最盛期になる享保から宝暦年間にかけて、その像容に画一的な特徴がみられるようになる。

享保三年銘の下曽根市杵島神社の像容（写真5）にみられるように、主尊の目がいわゆるアーモンド形で、右手に鈴状または人身の頭部らしき袋状のものを持ち、宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力がない邪鬼がうずくまる姿の特徴は、印旛地区・印西地区から白井市や船橋市の東部、我孫子市・柏市・栄町に広がり、延享三年には八千代市に達するが、千葉市・佐倉市・成田市などその他の地域では報告されていない。

また三猿の意匠も、両端横向きで中央が正面向きの形が

写真3　大森長楽寺の青面金剛像庚申塔　正徳五年銘
（二鬼三猿二童子と二仁王が彫像された塔）

写真4　船尾東光院の青面金剛像庚申塔　延享三年銘

矛・弓・矢を持つ六臂像と、合掌せず右手に人身（ショケラ）左手に剣を持つ六臂像が一般的で、さらに日月・二鶏・三猿・邪鬼、まれに二童子が付く。

印西地区では、上町観音堂の元禄十三年銘（一七〇〇）銘の道標を兼ねた笠付の塔、大森長楽寺の正徳五年よく類似し、配置される台座や塔身下部のスペースにより、一列の平型、または三角型に配置する特徴がある。享保三年銘の物木の庚申塚の三猿文字塔はこの三角型の初出で、享保九年戸神宗像神社三猿文字塔がつづく。また物木の庚申塚に宝暦四年（一七五四）に造立された庚申塔（写真6）にも、青面金剛像の下に三角型に配置した三猿が刻まれてある。

これらの特徴を大畠洋一氏が「生首持ち型青面金剛」と提起、[15] さらに印旛・手賀沼周辺に限定してこの青面金剛像塔が一一八基、三猿文字塔が一七基あり、時代も享保三年（一七一八）から宝暦十二年（一七六二）の四十四年間に限定されること、この時期の全青面金剛像塔の二五％を占め、印西市では四二基、次いで白井市で二三基が確認され

写真5　下曽根市杵島神社の青面金剛像庚申塔　享保三年銘

写真6　物木庚申塚の青面金剛像塔　宝暦四年銘

ることが、石田年子氏により報告されている。[16]

3　印西市域の百庚申

江戸中期終わりの寛政期（一七九〇年代）のころから、下総地方の庚申塔は、青面金剛像塔から三猿付文字塔に替わり、後期前半は「青面金剛」の主尊名、文政期頃からは「庚申塔」銘の文字塔となるが、印西市域の庚申塔で特異なのは、江戸後期から近代にかけて建立された「百庚申」である。通常、百庚申は、駒型の文字塔九基毎に青面金剛像塔一基ずつを一〇組並べて配置するのを基本とする。

武西の百庚申は、文久三年（一八六三年）の造立で、当時の形態を最も良く残しており、平成十一年三月に印西市の指定文化財（記念物・史跡）になっている。（写真7）

写真7（上）　武西の百庚申塚　文久三年
写真8（下）　笠神社の百庚申　慶應元年～三年

このほか印西地区の浦部・小林、印旛地区の松虫台、本埜地区笠神の笠神社（写真8）を含め、印西市域を中心に二〇か所の百庚申（一石百庚申を除く）が、「武西の百庚申」[17]で紹介されているが、最近の調査では、我孫子市でさらに大光寺と岡発戸八幡神社の二か所[18]と、船橋市前原東路傍、また本埜地区笠神でも蘇羽鷹神社の近代の百庚申が見

つかっており、今後の詳しい調査報告が待たれる。

二　十九夜塔の概況

1　十九夜塔の発祥と印西市域への伝播

関東北東部では、旧暦十九日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、如意輪観音の坐像や掛け軸の前で経文、真言や和讃を唱える「十九夜講」が盛んに行われていたという。この十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」であり、右手を右ほほに当てた思惟相で、右ひざを立てて座る半跏坐の如意輪観音像が主尊として彫刻される。

十九夜塔の発祥としては、茨城県つくば市平沢の八幡神社にある雲母片岩の石塔が、大日如来らしき坐像と「寛永九年（一六三二）三月十九日」の銘が刻まれていることから、これが最古と推測されるが、[19]十九夜塔の初出とされるのは、「十九夜」の銘が刻まれているつくば市北条新田の寛永十年の自然石型文字塔である。[20]

千葉県では承応元年（一六五二）の香取市石納地区結佐大明神境内の「十九夜侍之供養／十二月十九日」銘の宝篋印塔の残欠が古く、次いで、明暦元年（一六五五）造立の芝山町加茂普賢院の「十九夜待」銘のある六地蔵立像石幢、三番目は、万治二年（一六五九）山武市本須賀大正寺の「十九夜念佛」銘の宝篋印塔で、このころまでは十九夜の講も念仏講と不可分であり、また主尊も定まっていなかったようである。

如意輪観音を主尊とした十九夜塔の初出は、茨城県利根町布川の徳満寺の万治元年銘の四手の如意輪観音像を線彫りした板碑型石塔とされている。さらに舟型光背に二臂の如意輪観音像を浮彫りした典型的な十九夜塔が出現するのは、万治三年山武市戸田の金剛勝寺の二臂像の石塔で、これに寛文三年（一六六三）山武市松ヶ谷の勝覚寺の塔が続くが、先駆的であった山武市での造立はこの二基のみで絶える。

一方、印西市域では、寛文五年の小倉青年館の十九夜塔（写真9）を初出として、寛文十年までの五年間に、二一基の如意輪観音像の十九夜塔が集中的に造立される。その像容は、二臂または、六臂の像で、二臂像は右手を頬に当て、左手を左ひざの上に置く。儀軌では下げた手が膝の後ろに伸ばす触地印を示すとされるが、石仏では膝に置くのが、ほとんどである。六臂像は、さらに右手で胸に如意宝珠、下げた手に数珠を、左手には輪宝、蓮華を持つ。

寛文五年の小倉青年館の二臂像をはじめ、寛文八年の和泉青年館の六臂像（写真10）などは厳めしい表情の如意輪像であったが、寛文九年の小林光明

写真9　小倉青年館の二臂如意輪観音像十九夜塔　寛文五年銘

写真10　和泉青年館の六臂如意輪観音像十九夜塔　寛文八年銘

寺の六臂如意輪像塔（写真11）と同年の中根の福聚院の六臂如意輪像塔（写真12）など、主尊の顔立ちも女性的で美しく、一部透かし彫りが施されるなど、優れた像容の塔が多く造られる。白井市指定文化財である延命寺の寛文十年の六臂の十九夜塔も、これらの流れから周辺地域へ広がったのであろう傑作の一例である。

写真11　小林光明寺墓地の六臂如意輪観音像十九夜塔　寛文九年銘

写真12　中根福聚院の六臂如意輪観音像十九夜塔　寛文九年銘

寛文五年の初出例から印西市域の五年間の十九夜塔数二一基は、同時期の千葉県内の光背型如意輪観音像の十九夜塔三四基の約六割を占める。また、表1と表2の市町別の十九夜塔の数と初出年を、庚申塔と比較してみると、印西市域では、庚申塔数の約六割の三七八基が造塔されている。しかも、青面金剛像の庚申塔の造立よりやや先行し、また周辺各市町でも寛文八年から数年間の短い期間内に一斉に造塔されている。

利根川下流域や印西市から我孫子市・白井市・香取市・栄町・佐倉市・八千代市などに広がった光背型如意輪観音像の十九夜塔は、延宝年間には、酒々井町・銚子市・流山市など下総全体にも普及し、下総における十九夜塔は、総数約二三〇〇基に達する女人講の代表的な石塔となる。

その像容は、ほとんどが儀軌どおりの二臂如意輪観音像（写真13）であるが、我孫子市江蔵地の享保三年（一七一八）銘の十九夜塔（写真14）[21]や岩戸伊付の宝暦二年（一七六二）銘の十九夜塔（写真15）などのように、左手に蓮華を持つ像もみられるようになる。

2　下総地方の十九夜塔の推移

表3と図1は印西市内の十九夜塔と子安塔を、表4と図2は下総地方の十九夜塔について、「下総地方の十九夜塔

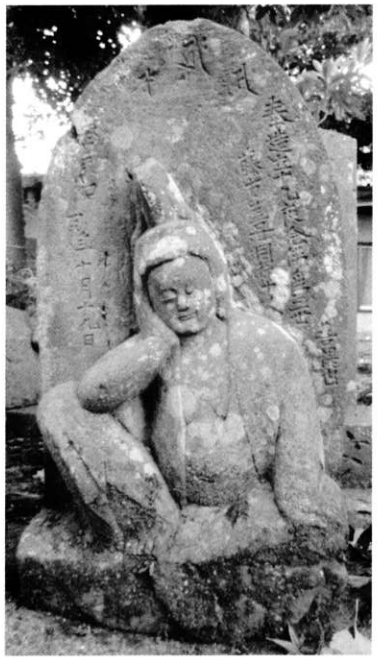


写真13　中根福聚院の二臂如意輪観音像十九夜塔　宝永四年銘

写真14　我孫子市江蔵地の如意輪観音像十九夜塔　享保三年銘（未敷蓮華を持つ）

写真15　岩戸伊付の如意輪観音像十九夜塔
宝暦二年銘（未敷蓮華を持つ）

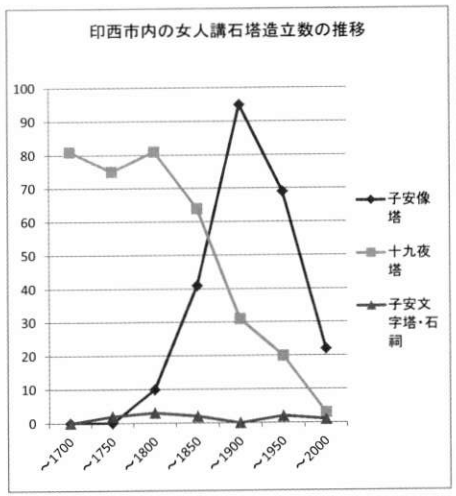
と女人講[22]」の表2をもとに、その造立数を五十年間隔で地域別に集計した表およびグラフである。印西市域及び利根川中流域で、江戸時代前期（十七世紀後半、寛文から正徳年間）から他地域に先行して盛んに造立された十九夜塔は、中期（十八世紀代、享保から享和年間）にはピークに達するが、後期の前半ごろ（十九世紀前半の文化から天保年間）から徐々に減少に転じ、幕末から近代にかけて衰退の道をたどる。

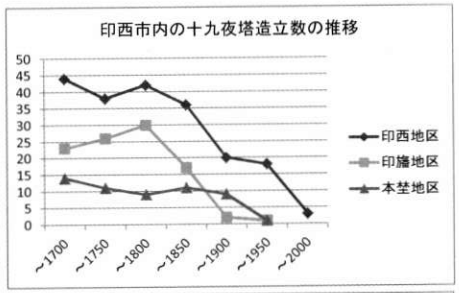
中期前半に追随して造立数が伸びていった印西市域に隣接する印旛・手賀沼周辺域も、後期以降は同様の傾向を示すが、前期から活発な造立が行われていた利根川下流域では、後期には急激に減少し、その後は造立されなくなる。いずれも、如意輪観音像を刻む十九夜塔から子安像塔へと交替していく過程での変化であるが、香取地方など利根川下流域での極端な減少は、江戸後期からこの地域で盛んになる復古神道の影響も考えられる。

一方、下総西部の江戸川流域は、中期以降も造立数は低調で、十九夜塔造立が稀な地域といえるが、利根川

表3　印西市内の十九夜塔・子安像塔などの造立数

造立年代	十九夜塔				子安像塔				子安文字塔・石祠
	印西地区	印旛地区	本埜地区	印西市計	印西地区	印旛地区	本埜地区	印西市計	
～1700	44	23	14	81	0	0	0	0	0
～1750	38	26	11	75	0	0	0	0	2
～1800	42	30	9	81	1	6	3	10	3
～1850	36	17	11	64	13	21	7	41	2
～1900	20	2	9	31	47	39	9	95	0
～1950	18	1	1	20	32	23	14	69	2
～2000	3			3	9	11	2	22	1
不　明	17	1	3	21	9	8	3	20	1
合　計	218	100	58	376	111	108	38	257	11





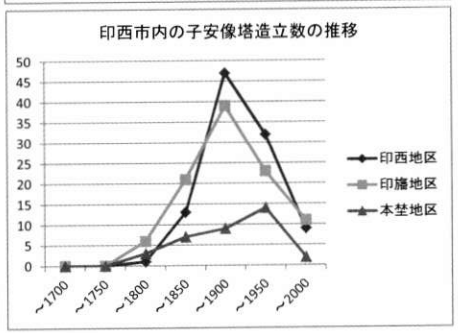


図1　印西市内の十九夜塔・子安像塔などの造立数の推移

表4　下総地方の十九夜塔造立数　石田（註9）の表を地域別（＊表5）に集計

造立年代	江戸川流域	東京湾岸域	野田市	利根川中流域	印西市	印旛・手賀沼周辺	利根川下流域	東総地域	下総 計
～1700	46	32	8	78	81	44	134	19	442
～1750	15	86	24	77	75	68	147	33	525
～1800	10	67	39	83	81	88	107	42	517
～1850	25	31	122	61	64	72	16	12	403
～1900	16	13	55	19	31	43	2	2	181
～1950	1	3	7	4	20	13	0	0	48
～2000	0	0	0	0	3	13	0	2	18
不　明	5	49	6	27	21	15	31	5	159
合　計	118	281	261	349	376	356	437	115	2293

＊表5　地域別の市町村名（2005年当時）

江戸川流域	東京湾岸域	野田市	利根川中流域	印西市	印旛・手賀沼周辺	利根川下流域	東総地域
市川市	船橋市		柏市	印西市	沼南町	神崎町	富里市
浦安市	鎌ヶ谷市		我孫子市	本埜村	白井市	佐原市	八街市
松戸市	習志野市		栄町	印旛村	八千代市	山田町	芝山町
流山市	千葉市		成田市		四街道市	小見川町	旭市
			大栄町		佐倉市	栗源町	八日市場市
			下総町		酒々井町	東庄町	山武市
						銚子市	成東町

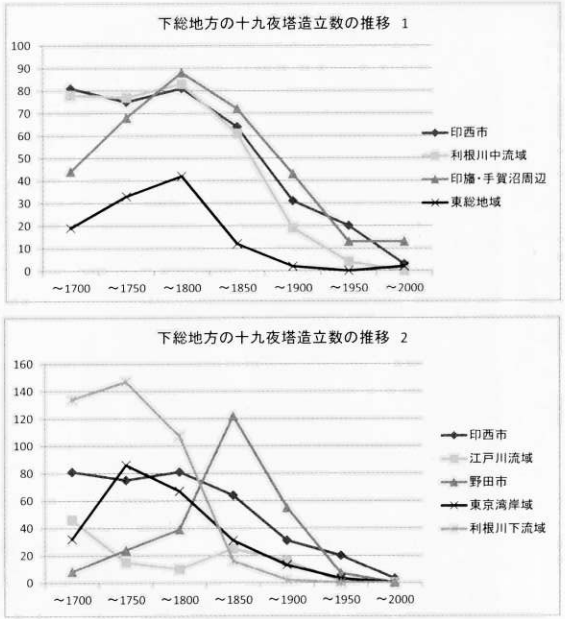


図2　下総地方の十九夜塔造立数の推移

と江戸川の分岐に位置する野田市域は、後期に造立数が急激に増加し、他地域が十九夜塔に替わって子安像塔を造立する傾向の中、子安像塔ではなく、豊富な石材を使った凝った彫りの十九夜塔造立がブームとなるという特異な現象が起こる。その頃、十九夜塔の造立が盛んになる埼玉県や栃木県などの利根川上流域からの影響にくわえて、醸造業や水運で女性の活動も活発だったという野田市域ならではの現象とも考えられる。[23]

以上のように、江戸時代前期から中期にかけての下総での十九夜塔造立の伝播の中核となったのは、印西市域であった。その要因としては、山岳宗教の影響を受けて常陸で芽吹いた十九夜念仏と、十九夜塔造立の揺籃の場となった利根町など利根川対岸の信仰文化を、印西市域が受容しやすく、それらを、印旛沼を通じて下総全体に発信しやすい位置にあったこと、我孫子市正泉寺の血盆経にみられるような、血の池地獄からの救済を説く女人成仏への信仰が利根川中流域で盛んだったことなどがあげられる。

また、この地域が印旛沼・利根川水運がもたらした経済的な豊かさが基盤にあったことも一つであろう。[24]

三　子安像塔の成立と現況

1　下総での子安像塔の成立と中期の様相

江戸時代後期後半から下総地方では、如意輪観音像を主尊とした十九夜塔に替わって、子安像を刻んだ子安像塔が女人講の石塔を代表していく。[25]　現在までを含むその数は、約一〇三九基と下総地方の全十九夜塔の約半数を占め、特に、印西市域とその周辺では、数的にも群を抜いている。

子授けと安産を祈願する子安信仰は、石祠や丸石などを祀る原初的な基層信仰として、道祖神祭祀などとともに普

遍的に存在したであろうが、「子安」と刻まれた石造物が下総地方に最初に現れるのは、八千代市上高野の子安神社の石祠で、元禄十六年（一七〇三）「子安大明神」の銘がある。

文字銘のみで像容のない子安塔としては、印西市域では元文三年（一七三八）浦部の鳥見神社の「子安大明神」銘の石祠、松崎の火皇子神社の寛延八年（一七六二）笠付角柱型の石塔など一一基、下総地方全体では一一六基が主に神社境内に存在している。

一般に「子安観音」と通称される子安像塔は、十九夜塔などの月待塔が多い利根川中流域から生み出されてくるといわれているが、むしろ月待塔の少ない酒々井町において、享保十八年（一七三三）「子安大明神」銘の子安立像が尾上住吉神社境内に登場する。（写真16）下総では最初の子安像塔であり、酒々井町ではさらに続いて、柏木新光寺墓地において元文五年（一七四〇）「村中善女」銘の石祠に安置された丸彫り子安坐像が現れる。（図6上段）

この元文五年の小さな子安像塔は、①おんぶと抱っこの二児を配した子安像と、②石祠内に子安像があることが特徴で、①と②の両方の事例は、酒々井町伊篠白幡神社と佐倉市・成田市で計四基がある。

①の二児を配する二児型子安像塔は、一六基あり、印西市域や栄町に多く、中でも本埜地区瀧水寺の安永五年（一七七六）「子安観世音」銘の子安像塔（写真17）は、今も美しい姿で祀られている。

②の子安像を石祠内に安置または浮彫りした石祠型の子安像塔は、浦部の鳥見神社の文化三年（一八〇六）銘の石祠（写真18）など、中期から後期にかけて下総全体で一三基ある。

この①二児型と②石祠型の特徴のルーツは、上総地方の袖ケ浦市百日木子安神社の子安像塔（図6左上）に求めることができる。祠の中に、肩と懐の二児と共に主尊を浮き彫りにしたこの「子安大明神」銘の女神像は、元禄四年

写真16　尾上住吉神社境内の子安像塔
享保十八年「子安大明神」銘

写真17　滝瀧水寺の子安像塔　安永五年「子安観世音」銘

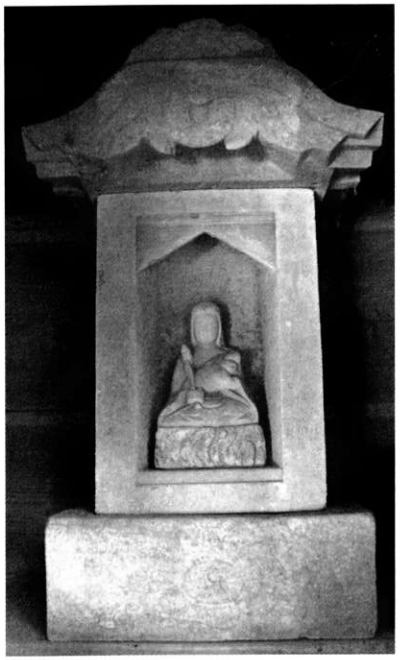


写真18　浦部鳥見神社の子安像塔　文化三年銘

（一六九一）の銘をもつ。[26] 筆者の調査では、この子安像塔が千葉県内最古である。

以上のような成立萌芽期の二児型と石祠型の子安像塔は、仏教的儀軌による如意輪観音像を主尊とする十九夜塔とは異なり、原初的な神道祭祀の主尊「子安神」の姿を造

図6　出現・萌芽期の子安像塔

像する過程で生み出された特異な石造物であると考えられる。

一方、利根川中下流域では、栄町に元文五年（一七四〇）「子安観音」銘の光背型子安像塔、香取市虫幡に元文六年「八日講」（出羽三山信仰の講）の銘の子安像塔が造られる。半跏坐で懐に子を抱いたそれらの像容は、真正面を向いた大日如来像を彷彿とさせる姿で、湯殿山などの山岳密教と子安信仰が不可分であった可能性を示唆させる。

また十九夜塔の主尊の如意輪観音像に子を抱かせた子安像塔も、宝暦元年（一七五一）酒々井町尾上住吉神社に登場する。右手を頬に当て左手に子を抱かせた姿で、「子安大明神」と「女人講中」の銘がある。（図6下段）

写真19　行徳稲荷神社の子安像塔
宝暦五年「十九夜念仏講中」銘

その後、この像容の子安像塔は、宝暦五年に本埜地区行徳の稲荷神社に「十九夜念仏講中」の銘で建てられ（写真19）、続いて、明和元年（一七六四）に印旛地区平賀の不動堂に「念仏講中善女」銘（写真20）で、さらに近くの観音堂にも同年に全く同じ姿で造塔されるなど、富里市・船橋市などの例を含め、下総全体では江戸中期で計一四基を数える。

これらの大日如来像や思惟相の如意輪観音像に子を抱かせた子安像塔は、従来の十九夜など月待塔や念仏講の主尊の「子安観音」像として造像された可能性が高い。

このほか、岩戸の西福寺では、安永四年（一七七六）に

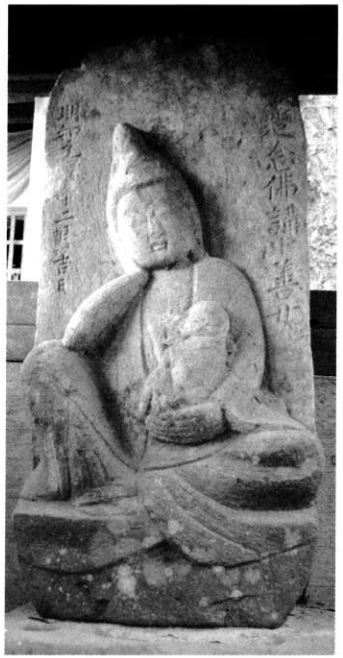


写真20　平賀不動堂の子安像塔
明和元年「念仏講中善女」銘

7）

印西市
岩戸 西福寺
安永5年（1776）

我孫子市
江蔵地青年館
天明元年（1781）

印西市
松崎火皇子神社
天明7年（1787）

佐倉市
鏑木周徳院
寛政6年（1794）

図7　印西市域から発展した中期子安像塔の一型式

両手で子を抱き、体を傾けて子を見つめる姿の子安像塔が造られ、このスタイルは天明七年（一七八七）に松崎の火皇子神社をはじめ、岩戸の高岩寺や広済寺、荒野の安楽院など印西市域に七基あり、江戸中期のこの地域に特有な像容ということができる。そしてこの像容は、中期末に佐倉市や千葉市に伝播し、後期前半の代表的な像容として下総各地に広がっていく。（図

2　江戸後期の子安像塔の変化

江戸中期に酒々井町や栄町、小見川町（現香取市）、印旛地区などで創造された子安像塔は、その慈愛に満ちたやさしい姿が好まれ、後期には印旛沼周辺や利根川下流域から下総各地に広がる。化政文化の反映であろうか、蓮華や子をあやす玩具を持ち、天衣をまとう華麗な像も、石工の創意と技で造られるようになる。

一方、復古神道の影響か、利根川下流域の東庄町では吉野の「子守明神像」を、神崎町では神功皇后像をモデルにしたと思われるユニークな子安像塔も建立されている。[27]

江戸後期の子安像塔の保存状態は軟質石材のため良好とはいえないが、祠内に安置されている八千代市島田台長唱寺（天保十一年）・鎌ヶ谷市鎌ヶ谷八幡神社（天保十四年）・白井市中薬師堂（弘化三年）・戸神青年館（嘉永七年　写真21）などでは、建立当時の美しい姿の子安像塔を見ることができる。

また後期では、目的や主尊の格をあらわす銘も、台石などに大きく「女講中」あるいは「女人講中」と記すように変化する。おそらく建塔する講の性格も、女人救済の念仏主体の講から、安産と子育てを祈願し、集落の女性たち共同体の親睦を深める目的の子安講へと変わっていったのであろう。

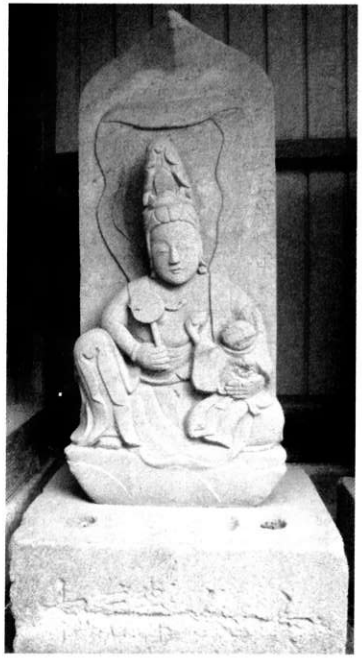


写真21　戸神青年館の子安像塔
嘉永七年「子安観世音・女人講中」銘

3　近代から現代へ続く子安像塔

表6と図3および、表7と図4は、筆者が参考文献の各自治体等の調査報告書をもとに実見した子安塔を集計し、表とグラフにしたものである。図5は、子安塔に、石田年子氏の報告[28]をもとに集計した十九夜塔の造立数と合わせたグラフである。

幕末のころ、下総地方では、子安像塔は如意輪観音像の十九夜塔を凌駕する数が造塔されるようになり、明治時代以降は、女人講が建立する石造物の主流となる。明治から大正期の終わりまでの造塔数は五八年間に三四八基という数にのぼるが、一方、その地域差も大きくなる。

明治維新時廃仏毀釈が激しかった香取神宮の信仰圏の利根川下流域と東総地域では、維新後、十九夜塔の造立も無くなり、子安像塔に切り替わるが、その数は多くはない。また、江戸期を通じて十九夜塔の数も低調だった江戸川流域では、子安像塔に切り替わることなく、女人講による造塔は、近世の終焉とともに幕を閉じる。

一方、印西市域と印旛沼周辺の地域では、幕末に子安像塔に替わるが、講の名称として「十九夜」の銘を残す子安像塔もある。何年かおきに造塔する習俗も、

表6　下総地方の子安像塔造立数

造立年代	東京湾岸域	利根川中流域	印西市	印旛・手賀沼周辺	利根川下流域	東総地域	下総　計
～1700	0	0	0	0	0	0	0
～1750	0	2	0	3	2	1	9
～1800	11	21	10	11	28	12	94
～1850	47	18	41	55	64	9	235
～1900	51	10	95	105	26	4	292
～1950	25	8	69	82	15	3	198
～2000	10	0	22	59	2	1	94
不　明	21	7	20	15	30	7	100
合　計	165	66	257	338	172	37	1039

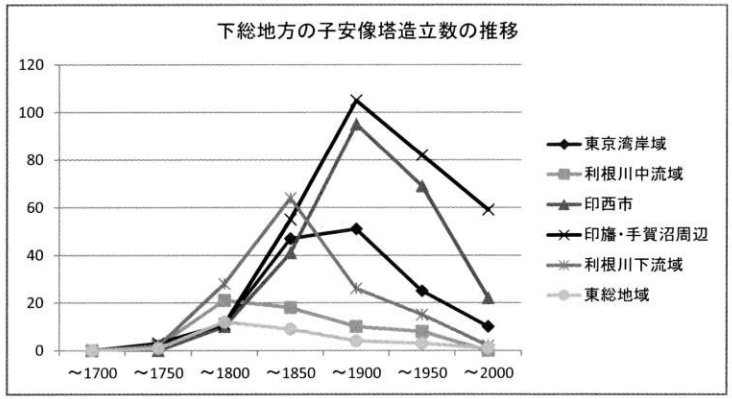


図３　下総地方の子安像塔造立数の推移

印旛地区・佐倉市・八千代市・白井市などに多く、印西市域では、造谷の真珠院・角田の薬師堂・師戸の広福寺・鎌苅の東祥寺などの寺院や旧仏堂の境内に、数基以上の子安像塔が並ぶ光景も珍しくない。

近代の子安像の像容は、未敷蓮華を高く持ち、天衣を翻す像が多く、自由な発想によるふくよかな授乳姿の母子像など変化に富むが、模倣による類型も地域ごとに多い。授乳する姿で母子ともに豊満な像が、大正時代の八千代市以西を中心にみられるが、これらは富国強兵を背景に『産めよ増やせよ』の時代で、また宗教的な因習を排し、母子保健に力が注がれた時代であったことを象徴しているように思われる。

印旛沼周辺の地域における近現代の代表的な像容は、蓮華と天衣が特徴の戸神青年館の明治十九年（一八八六）の子安像塔（写真22）で、細部まで同じ意匠を含め類型は四三基、天衣がないが同じ姿の類型は一六基を数える。

また小林光明寺墓地の大正七年（一九一八）の子安像塔（写真23）など、高く角張った宝髻と丸顔に沿った垂髪で授乳する姿が特徴的な子安像塔が、印西市域中心に一八基の類型がある。

現代に入ると、戦後の一時期は造塔も少なく、あっても石工の技量の乏しい像が多い。その後の都市化や少子化で、子安講も解散した地域もみられるが、師戸の広福寺、鎌苅の東祥寺、松崎の中郷多聞院、前戸向堂などでは、平成に入ってからもなお造塔が続いており、また八千代市下高野の福蔵院や佐倉市生谷の専栄寺では、平成二十年以降の新しい子安像塔も見ることができる。

表７　下総地方の子安文字塔・石祠造立数

造立年代	東京湾岸域	利根川中流域	印西市	印旛・手賀沼周辺	利根川下流域	東総地域	下総　計
～1700	0	0	0	0	0	0	0
～1750	0	0	2	3	1	9	15
～1800	8	2	3	14	3	5	35
～1850	13	3	2	9	3	8	38
～1900	2	3	0	4	1	2	12
～1950	1	1	2	0	0	0	4
～2000	1	0	1	0	0	0	2
不　明	3	0	1	4	1	4	13
合　計	28	6	11	34	9	28	116

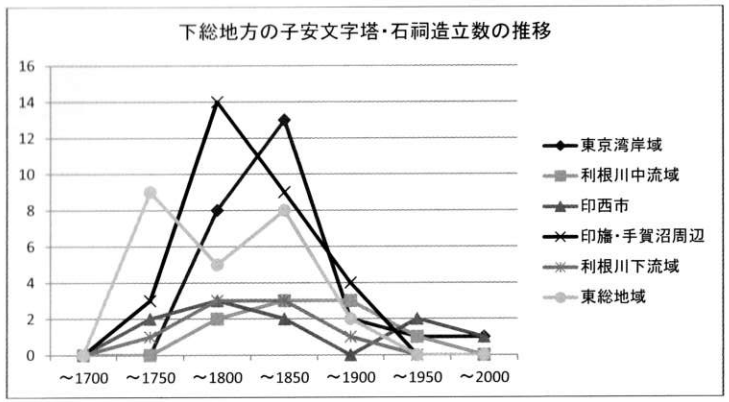


図４　下総地方の子安文字塔・石祠造立数の推移

おわりに

下総地方の地域共同体による石造物の代表として、庚申塔・十九夜塔・子安像塔を取りあげ、その年代別の推移と分布の地域性を集計・グラフ化を試みた結果、印西市域は講の石塔が数多いだけでなく、近隣からすばやく受容し、そして周辺地域に発信する機能性に富む

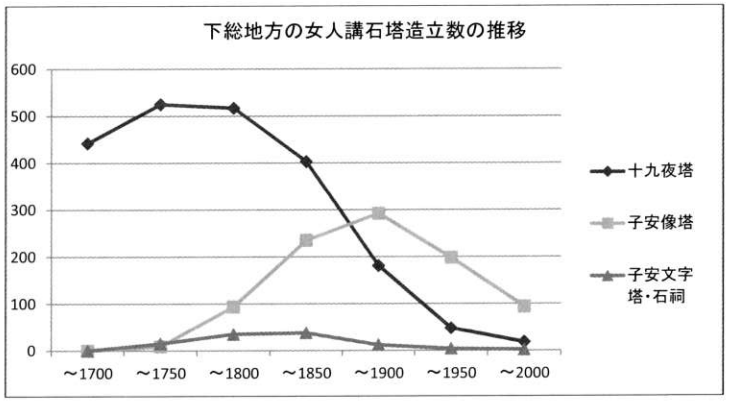


図５　下総地方の女人講石塔造立数の推移

写真22　戸神青年館の子安像塔　明治十九年「女人講中」銘

写真23　小林光明寺墓地の子安像塔　大正七年銘

の石造物についても悉皆調査が進み、印西地区の調査報告書のような詳細なデータが揃うことにより、印西市域全体の歴史と民俗がより明らかになっていくことが期待される。

（註）

1　『印西町石造物第一～八集』（印西町教育委員会、一九七九～九一年）。

2　前掲註2、『石との語らい』（印西町教育委員会、一九九二年）。

3　崙書房、一九九二年。

4　前掲註1。

5　『白井町石造物調査報告書』第一集～第四集（白井町教育委員会　一九八六～八九年）。

6　八千代市史編さん委員会「石造文化財」『八千代市の歴史　近代・現代Ⅲ　石造文化財』三七九～四九八頁（八千代市、二〇〇六年）。

7　千葉県石造文化財調査団『千葉県石造文化財調査報告』（千葉県教育委員会、一九八〇年）。

8　白井豊・吉村光敏・吉田文夫・西岡宣夫「下総地方中部8市町村（習志野市・佐倉市・成田市・四街道市・酒々井町・八街町・印旛村・本埜村）石造文化

地域であることが再認識された。

石造物は、地域の人々の信仰の対象であるとともに、建てられた時から、公共の場にひろく「公開」されてきた野外の文化財であり、語り部である。今後、印旛・本埜地区

財データベース2011年版」。

9　『房総の石仏』第二四号二二～三三頁、二〇一四年。

10　『房総の石仏』第二〇号三八～六三頁、二〇一〇年。

11　『房総の石仏』第二一号一八～三六頁、二〇一一年。

12　『房総の石仏』第二二号四六～六六頁、二〇一二年。

13　なお、我孫子市内には、中央公民館中庭に天正九年（一五八一）の「申待供養」銘の中世板碑がある。

14　大畠洋一「青面金剛のオリジンを探る」（『日本の石仏』七二号　四頁、（一九九四年）

15　大畠洋一「生首持ち型青面金剛」（『日本の石仏』一四八号　六九頁、二〇一三年）。

16　石田年子「印旛・手賀沼周辺の『生首持ち庚申』の詳細」（『日本の石仏』一四九号五〇～五一頁、二〇一四年）、「北総の生首持ち庚申」日本石仏協会公開講座資料（二〇一四年）。なお、二〇一五年に筆者が中根でも写真6と同じ像容の寛延二年（一七四九）銘の庚申塔を実見しており、印西市内の数は四三基にのぼる。

17　榎本正三「武西の百庚申」（『房総の石仏』第十二号一九～二九頁、一九九七年）。

18　我孫子市史研究センター合同部会『我孫子の庚申塔』（二〇〇〇年）。

19　筑波町史編纂委員会『筑波町石造物資料集　上巻』一三六～一三七頁（一九八三年）。

20　中上敬一茨城県の十九夜念仏塔」（『茨城の民俗』第四四号八七～九五頁、二〇〇五年）。

21　我孫子市江蔵地青年館の享保三年銘の十九夜塔を、『我孫子市史資料　金石文篇Ⅰ石造物』では、「如意輪観音・十九夜塔」の「（如意輪観音浮彫）」の下に「＊赤子を抱く。」と記載している。榎本正三氏は、この十九夜塔を「抱き子の子安観音」（「金石文が語る女人信仰」『印西町の歴史』第二号）とされ、「子安観音の像容の起源として、利根川下流域を中心に、如意輪観音像を刻む十九夜塔が盛んに建てられる中で、子を抱く如意輪観音の姿が創りだされる」（『女人哀歌』）と述べ、また『石との語らい』でも「如意輪観音からの変容」の例として紹介されている。平岩毅氏もこの塔が「（千葉）県内最古」で「（子安）観音の発祥地を暗示する」（「子安観音」『房総の石仏百選』）と述べておられるが、筆者が実見すると、未敷蓮華を持つ思惟相の如意輪観音像であった。

22　前掲註9。

23　石田年子「利根川中流域の女人信仰－野田市・十九夜塔を中心として－」（『研究報告』第一〇号一六～

三三頁、千葉県立関宿城博物館、二〇〇六年）。

24 前掲註9、16。

25 筆者は、子安像の有無に関係なく「子安塔」と総称される石塔について、女神や観音などの母性を明らかにした主尊が子を抱く像を「子安像」、この像容のある石塔・石祠を「子安像塔」と定義し、像容はないが「子安大明神」や「子安観音」など「子安」の銘のある石塔と石祠を「子安文字塔・石祠」と分類し分析する。

26 『千葉県石造文化財調査報告』に、「元禄三年」（一六九〇）の初出として報告されている銚子市若宮町東岸寺の子安塔は、風化崩壊が進んでいて銘文は「文」の字のみ判読が可能であった。形状や石材の質から、江戸時代後期の文化三年または文政三年であろうと思われる。なお、「元禄三年の銚子市の子安観音」というこのデータは、『千葉市文化財調査報告』や『船橋市の石造文化財』に、千葉県の子安観音の最古例として記述されている。

27 拙稿「東庄町の子安塔」（『東庄町石造物調査報告』一九～二二頁、二〇一三年）

28 前掲註9。

参考文献

足立区教育委員会文化財調査金石文調査団　一九八六年『足立区文化財調査報告書　庚申塔編』足立区教育委員会

我孫子市金石文編集委員会　一九七九年『我孫子市史資料金石文篇Ⅰ石造物』我孫子市教育委員会

入谷雄二　二〇一一年「データから見た庚申塔の造立」『房総の石仏』第二一号一～一二頁　房総石造文化財研究会

海上町教育委員会　一九八六年『海上町の石造文化財　増補版』

榎本正三　一九八六年「金石文が語る女人信仰」『印西町の歴史』第二号二～四〇頁　印西町史編さん室

一九八九年「十九夜塔の銘文からみた女人信仰」『房総の石仏』第五号九～三〇頁　房総石造文化財研究会

一九九三年「北総の子安塔とその背景」『日本の石仏』六六号四～一六頁　日本石仏協会

一九九九年「如意輪観音」『房総の石仏百選』六〇～六一頁房総石造文化財研究会編　たけしま出版

小見川史談会　二〇〇九～一二年『小見川の石造物（西地区編）』『同（北地区）』『同（中央地区）』『同（東・南地区）』

柏市教育委員会　一九九六年『柏の金石文（1）』

鎌ケ谷市郷土資料館　一九八六年『鎌ヶ谷市資料編Ⅱ金石文』

一九九三年『鎌ケ谷市郷土資料館調査報告書Ⅲ（鎌ケ谷の民間信仰）』

神崎町史編さん委員会　一九八五年『神崎町史資料集金石文等』神崎町

栄町文化財審議会一九八八年『栄町の地蔵・観音』栄町文化財シリーズ第二集　栄町教育委員会

芝山町町史編纂準備室　一九八二年『芝山町石造文化財調査報告』芝山町教育委員会

芝山町史編纂室　二〇一三年『芝山町史　石造物編』芝山町教育委員会

下総町立歴史民俗資料館　二〇〇六年『下総町石造物目録』

沼南町史編さん委員会　一九九二年『沼南町史　金石文（Ⅰ～Ⅱ）』沼南町教育委員会

関宿町教育委員会　一九八三年『関宿町の石物　文化財調査報告第一集』

千葉市教育委員会　一九八一年『千葉市文化財調査報告書　第五集　路傍の石仏』

富里村教育委員会　一九八一年『富里の石造文化財』

中上敬一　一九九〇年「十九夜念仏源流考」『日本の石仏』五四号二〇～三〇頁　日本石仏協会

流山市教育委員会　一九七一～七四年『流山市金石文記録集（上・中・下）』

流山市立博物館　一九八七年『流山市の石仏』

野田市史編さん委員会　一九六七年『民間信仰を中心とする野田市金石調査資料集』野田市

平岩毅　一九八五年「下総の子安信仰・石造品分布」『会報二四号』房総石造文化財研究会

一九八八年「千葉市の十九夜念仏」『房総の石仏』第六号　房総石造文化財研究会　一～一五頁

一九九九年「子安観音」『房総の石仏百選』六八～六九頁　房総石造文化財研究会編　たけしま出版

船橋市　一九八四年『船橋市の石造文化財（市史資料）』

船橋市史談会　一九七九年『船橋地区石造物調査報告（前篇）』

房総石造文化財研究会　二〇一三年『東庄町石造物調査報告』

松尾町　一九九〇年『石造物シリーズⅢ』

松戸市文化ホール　一九八六～八七年『松戸市内石造物文化財調査概報Ⅱ～Ⅲ』松戸市

横田甲一　一九八二年「如意輪観音と子安観音」『日本の石仏』二三号二三～三〇頁
四街道市文化財審議委員会　一九九七年『四街道市の文化財　二三号』四街道市教育委員会

参考ホームページ

石川博司　二〇〇四～一四年「庚申塔物語」『民俗の宝庫』
石仏信人　二〇〇八～一四年「北総石仏」『石仏神心』